

第六十六回〇先生賞

零と吉の森から

右の通り贈ることを決定した。

令和二年一月



作者略歴

一九六七年 神奈川県横浜市生まれ
二〇一六年 コスモス短歌会入会
住所 神奈川県横浜市

神奈川
寺^{てら}田^だ
静^{しずか}

コスモス短歌会

作者感想

三年前の夏、図書館で短歌の入門書に出会い、初めて歌を作ろうと思いました。ひとりで作るよりも、どこかに所属した方が長続きするだろうと、コスモスに入会したのがその一ヵ月後。そして現在に至ります。この三年間、心のおもむくままに、時に濃く時に淡く短歌の世界と向き合ってきました。そんな軸足の定まらない私の拙い歌に、このたび光を当てていただき本当にうれしく思います。今後ともこの光を頼りに、表現の試行錯誤を重ねていこうと思います。選者の皆様、東京歌会でお世話になった皆様、コスモスの会員の皆様に心より感謝申し上げます。

零と壺の森から

第六十六回〇先生賞受賞作品

神奈川

寺田

静

スマートフォン手のひらに包みきみたちはうなじを月にさらす旅人

液晶の小窓の奥に続くみち零と壺との森へのこみち

デジタルのみどり滴る森のなか昼ほの暗く夜やみ深く

捕らわれていると知りつつ歩きゆく獣のいないその獣みち

きみ向けの広告と声に囲まれて森はいつでもきみだけの場所

果てしなく続くページをめくる指 砂金を篩うひとの眼をして

きみのいるインスタでなく今はもうインスタに棲むきみでしかなく

スマートフォン鞆すがごとく指擦りて死ぬまでのとき鞆されてゆく

友達の他界を告げるSNS白き画面と黒きテキスト

ご冥福お祈りお悔やみふわふわとトーク画面に浮かび流れる

濃密な電子の森に響きたる零の葉、壺の葉こそれ合う音

あのとときの嘘も憎悪も建前も偽善の文字もまだ森のなか

われもまたきみたちでありきみたちは畏にかかった小さな羽虫

蜘蛛の巣の粘着質の細き糸からまりながら羽虫を屠る

零壹零零壹零の循環のきみを操る呪文の銀糸

多様性を説くおとなたちみな肥えてみな iPhone を握りしめおり
ほんとうのことを伝える顔をした画面が並ぶ仮面が並ぶ

とこしえにページの隅に色を置く日経電子版の向日葵

一言も漏れぬスーツの一群の上着の皺の多様性など

平然と嘘をつくひと自らの嘘に気づかずただ嘘をつく

正論はいつも疚しい金色のこよりでそっと手首を縛る

慣らされて均されていつかきみたちは液晶画面の枢の屍

賛同を拒む一瞬指とまる 拒まぬほうへクリックをする

遠ざかる終バスの赤き灯のごとくクリック音はいつも寂しい

ひとしづく湖面に波紋を広げおり波紋の内に映る葉の影

二言めを穏やかに待てるひとのいる世界は月見草の白いろ

うつむきてうなじをさらすきみたちに月光は降る白く真白く

いまきみがどんなに独りであろうとも光の粒はきみに囁く

森を出よデジタルの零と壹の森ゆっくり顎を押し上げて出よ

ゆっくりと顎を押し上げ空を見るきみの宇宙にまだ月はある

メッセー지가読み手に伝わるように

出席者

狩野 一男・木畑 紀子

風間 博夫・水上 芙季

上位五篇について

狩野 第六十六回O先生賞選考座談会を始めて、今回は八十五篇の応募がありました。では一位の寺田静さんの「零と壺の森から」から見ていきましょう。木畑さんが一位に推しています。

木畑 選考に当って、宮柊二先生の『短歌読本』を見ましたら、作歌の三要素というのがありました。心と言語と節調です。今回は三十首の作品ですので構成ということもプラスしました。「心」とは、個性や物の見方を含め、テーマだと思います。寺田さんの作品はテーマがはっきりしています。良い点は、情報ですべてデジタル化されていく現代社会への警告が詠われ、メッセーじ性があること、批評性があることです。「言語」で見ますと、社会詠でありながら非常に詩情のある言葉を使って人間が人間性を失っていく恐怖感も滲ませています。一首目（スマートフォン手のひらに包みきみたちはうなじを月にさらす旅

人）、スマホを手放せない若い人たちを「うなじを月にさらす旅人」と比喻して、導入の歌としていいと思います。六首目（果てしなく続くページをめくる指 砂金を飾うひとの眼をして）、いいと思いました。十一首目（濃密な電子の森に響きたる零の葉、壺の葉こそすれ合う音）、これは会話じゃなくて葉と葉がこすれ合っているだけだという鋭い比喻です。十三首目（われもまたきみたちでありきみたちは異にかかった小さな羽虫）、「きみたち」に「われ」も含んでいるところが、自己批評になっています。「節調」はリズムがなめらかで、読者の心にすうっと入ってくるところが特徴だと思います。構成はすばらしくて、一首目に（スマートフォン…）という歌を出して、最後に、二十九首目（森を出よ デジタルの零と壺の森ゆっくり顎を押し上げて出よ）と、三十首目（ゆっくりと顎を押し上げ空を見るきみの宇宙にまだ月はある）と



いう歌で収めています。現代人への警告ですが、まだきみたちに降り注ぐ月光があるよという希望的メッセージが最後に置かれていま

す。

狩野 風間さんも一位ですね。

風間 私も選考に当って、三十首が一首一首しっかり詠まれているか、定型になっているかに着目して作品を読みました。この作品は六割ほどが定型になっています。テーマ性もはっきりしていて、コンピューターの世界をスマホに代替させて詠っています。「零」と「壺」は二進法です。作品に串が通っていて、これほど一貫した串があるかと思っただけですが、ちよつと串が太すぎたかもしれません。スマホというデジタルの世界から入っていろいろな観点から詠まれています。二十九首目〈森を出よ…〉と三十首目〈ゆっくりと…〉の歌で救済されるわけです。宇宙にある「月」は希望ですね。構成がうまくできています。一首目の〈スマートフォン…〉という歌、「旅人」というのはちよつと抒情的な言い方で、上手すぎるな、小技が効いているなど少し気になりました。二首目の〈液晶の小窓の奥に続くみち零と壺との森へのこみち〉、初めて「森」が出てきます。「森」という限定された圧縮された空間に入ってゆくの

がスマホという手段です。五首目の〈きみ向けの広告と声に囲まれて森はいつでもきみだ

けの場所〉、スマホの特徴を現していて批評性があります。八首目〈スマートフォン鞆すがごとく指擦りて死ぬまでのとき鞆されてゆく〉は警告のある怖い歌です。十七首目の〈ほんとうのことを伝える顔をした画面が並ぶ仮面がならぶ〉の「仮面がならぶ」まで言わなくていいでしょう。リフレインが走りすぎです。二十三首目〈賛同を拒む一瞬指とま拒まぬほうへクリックをする〉は、「い

いね」じゃないほうに心が動いたのに、結局賛同の方を押しちやっただんですね。気になったところは、十二首目〈あのときの嘘も憎悪も建前も偽善の文字もまだ森のなか〉、この「偽善」は駄目押しのようにいらなくとも思いますが、昨年の作品にもありましたが、そういう所から抜け出してほしいなと思います。十六首目〈多様性を説くおとなたちみな肥えてみな

第66回O先生賞優秀作品順位表

(1位作品を10点とし、10位作品を1点とする)

題名	作者	狩野	木畑	風間	水上	合計	順位
零と壺の森から	寺田 静	10	10	10	9	39	1
雑草	稲垣 草歩	9	8	6		23	2
わが髪に吹く風	山口 照子		7	8	8	23	2
夏の扉を押す	斎藤 美衣	8	9		2	19	4
ポトルシッブ	有川知津子	7			10	17	5
こんちゅう姉さん	白川ユウコ	6	4	7		17	5
森ではなく	高橋梨穂子			9	5	14	7
二水	三沢 左右	3	3		7	13	8
済州島の灯	藤井 徳子	4	6	2		12	9
口角上げ	江頭 洋子		5		6	11	10
「令和」離陸	北条 忠政			4	4	8	11
未来を回せ	高山 幸子		5			5	12
風はきまぐれ	大平 勇次			5		5	12
眼鏡と私喜	佐藤 英子			3		3	14
白秋	千葉 クミ	2	1			3	14
七十五歳の夏	守行 慶子				3	3	14
夏に贈った夜想曲	藤川 玲子		2			2	17
家屋移転	鮎沢 永二	1				1	18
神様がくれたお休み	池田 毅			1		1	18
〈バザールカフェ〉より	桑原 博				1	1	18



木畑紀子氏

iPhoneを握りしめおり」と、十九首目の〈一言も漏れぬスーツの一群の上着の皺の多様性など〉の歌の「多様性」という便利な言葉がよくわからないところ。二十二首目〈慣らされて均されていつかきみたちは液晶画面の柩の屍〉の「ならされて」の漢字の使い方は上手いのですが、「柩の屍」は言い過ぎでどちらかでもいいと思います。それから、十三首目〈われもまた…〉の歌の「罨」という言葉、二十八首目〈いまきみがどんなに独りであろうとも光の粒はきみに囁く〉の「光の粒」というしやれた言葉が、昨年の作品にも使われていました。前作で使った言葉は使わないほうがいいのではないかと思いました。この作品で一番よかったことは、他の作品とは雰囲気全然違ったということです。

狩野 水上さんは二位に推しています。

水上 お二人と同じようにテーマが明確なところがいいと思います。デジタルな社会に対して感じている作者の信念が伝わってきました。挙げられていない歌では、十八首目〈とこしえにページの間を置く日経電子版の向日葵〉、初句に「とこしえ」という古語を使って、下の句では「日経電子版の向日葵」と無機質な向日葵を組み合わせています。句跨りも効果的です。二十四首目〈遠ざかる終バス赤き灯のごとくクリック音はいつも寂しい〉は、「赤き灯」という色で、「クリック音」という音を比喻にして共感覚という高度な技を使っています。二十五首目〈ひとしづく湖面に波紋を広げおり波紋の内に映る葉の影〉ですが、この歌だけだと実際の風景の中の湖ですが、この一連に置かれてると、「湖面」はスマホの「画面」を想像させて上手いと思いました。気になったのは強い言葉です。二十二首目の「柩の屍」、十三首目〈われもまた…〉の歌の「罨」、十五首目〈零瑛零零の循環のきみを操る呪文の銀糸〉の「呪文」などです。言葉が強い分、ちよつと違うんじゃない、と反発したくなるどころがありました。六首目の〈果てしなく…〉、八首目の〈スマートフォン…〉の歌ですが、砂金を篩う人の目はとても真剣なものだし、砂金を採るのも革を鞣すのもいろいろな工程を経る大変な作業なので、スマホを指

で扱う比喻としてひっかかりました。作品の中で言われている「きみ」の定義が私には難しかったです。全体を通して、少し高いところから見ているような視点で詠われていますが、十三首目にだけ〈われもまた…〉と「われ」が一度登場します。作者を消して詠ったほうが効果があるのではないかと思いました。狩野 ぼくも一位にしました。十八首目〈とこしえに…〉の歌の「日経電子版」というものは、サラリーマンにとって、欠かせないものなのでしょう。ぼくは最後の二首〈いまきみが…〉と〈森を出よ…〉の歌のつながりがわからなくて、二十九首目と三十首目を一つにして、別の一首を入れたほうがいいと思いました。三十首目の上の句で、顎を押し上げた後のことを詠んで、下の句に続けられれば百点です。全体的にまとまっていて、よく考えて作られています。

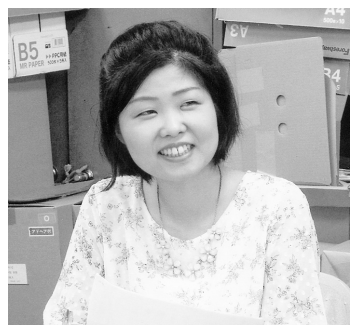
木畑 強い言葉が気になるっておっしゃいましたが、この方は、あすなるの方で二〇一六年コスモス入会でしょう。入会して三年、進める思いがあるから、強い言葉を使わざるを得なかったんだと思います。賞に応募してこれだけは言いたい、という作者の気持ちを大事にしたいです。ちよつとわからない歌もありました。二十一首目の〈正論はいつも疚しい金色のこよりでそつと手首を縛る〉と、二十

る世界は月見草の白いろです。この二首の意味がとれなかつたんですけど、寺田さんの挑戦意欲と表現力と新しい短歌のメッセージ性を大いに評価したいです。

狩野

はい。では、二位の稲垣草歩さんの

「雑草図鑑」です。ほか二位に推しています。タイトルがおもしろいです。一首目の「雑草」という植物はありません。雑草図鑑はきっぱりと書く」という歌から始まっています。作者は植物に詳しいのですね。最後の歌は一首目を受けている形で、「雑草」という植物はありません」その雑草の雑を愛せり」という歌です。全体にわかりやすく仕上げられています。二十一首目「うなだれたまままっつよ草萎みけり八月六日八時十五分」、この歌は広島県の原爆忘を悼んでいます。二十二首目「人は栄え人は滅びてゆくものと占城菊咲い



水上美季氏

て秋深まれり」の「秋深まれり」がいいですが、ほくが惚れ込んだ作品です。木畑さん、いかがですか。

木畑 愛してやまない雑草への心寄せという

ことでテーマがはっきりしていると思います。科学者でありながら、ときに哲学的な思索が入っているところが二連を豊かにしていると思います。私が三位にしたのは、リズムが定型なのですが、全体が平板というか、三句切れが多くて、そこに不要な読点が入っているんです。二首目は二句切れですが、「見て見てとう子の声聞こゆ、たんぼのぼのの芽生えの燃えるとき赤、だんだん失せて大人になりぬ」、十四首目「うっすらと紅蓼の咲く音がする、世界が始まる午前二時半」、十五首目の「植物の名はカタカナで書きなさい、シロバナヨウシュチヨウセンアサガオ」、すべて読点はいらなそうです。言葉の使い方ですが、八首目の「父の背という虚ろなる存在よ父衣草ひとつ物言わず咲く」の「虚ろなる存在」、九首目の「空の青、木々の緑を疑わず白花蒲公英の白の悲しき」の「白の悲しき」とか曖昧です。花言葉の歌がありましたね、二十四首目「役立たずの名を持つ蓼は「あなたのためにになりたい」の花言葉持つ」の花言葉のことはいらなそうです。言葉の選択がちよっと通俗的、概念的、常套的で、そこが研ぎ

澄まされていけばいいと思いました。それから「咲く」という結句が四首あります。いいと思ったのは、六首目の「いたどりの…」、二十六首目「初恋の人母となり祖母となりいつもの道に春紫苑咲く」など、植物に人生を重ねているところが興味深かったです。

風間 三十首中、二十種類の植物が植物名を

生かしながら詠まれています。私はこの一連は五位にしたのですが、四位にした「こんなゆう姉さん」が同じような作り方でどっちにしようか迷いましたが、一首目と三十首目はおもしろいのですが、同じようなのもつたいたないと思いました。でも、三十首目「雑草と…」の歌の「雑を愛せり」がこの作品の主旨なんだと思います。いいと思った歌は先ほど出ました六首目の「いたどりの…」の歌です。十五首目「植物の…」の歌ですが、植物名は全部カタカナで書いているのかな。

木畑 二十二首目の「占城菊」は漢字です。

「占城菊」はこの一首の中で漢字で書く意味があるんですよ。十五首目の歌ですが、「植物の名は」ではなくて「この花の名は」にすればいいのではないですか。「ヨウシュ」とか、「チヨウセン」とか漢字で書くという意味が深くなりますから、この歌はカタカナでいいんじゃないですか。

風間 そうですね。いいと思った歌は、七首

目、「火星よりたどりつきたる種ならんビロ



風間博夫氏

ードモウズイカの花光る》、「ピロードモウズイカの花」を調べたら、さもありなんという花なんです。二十五首目へくつついてまとわりついて知らぬ間に離れゆくものかおなもみの子は、「子」というのはとげとげした実です。先ほど出ました二十六首目の〈初恋の…〉の歌もいいと思いました。一首目で〈雑草と…〉と詠いながら、「雑草図鑑」と言っていますね。「雑草図鑑」という図鑑があるのかなと思つたらあるんですね。雑草という植物がないのに図鑑があるというのは、なかおもしろいと思いました。

狩野 ほかもおもしろいと思いました。かなり白熱した批評が続きました。では同じく二位の山口照子さんの「わが髪に吹く風」になります。水上さんが三位に推しています。水上 一首一首がわかりやすく、しつかりで

きています。全体の雰囲気静かで心地よい作品です。一首目〈ふくふくとふふめるままの白梅がけふのあかときはつかにひらく〉、出だしの歌として明るくて、八行音とA行音が響いてやさしい歌です。この方は図書館職員として働いています。四首目〈幾万の著者の思ひの熱量に圧されて書架の間に立ちをり〉、仕事の歌ですけれども、本が好きだけでなく、本の尊さ、素晴らしさを知っているからこそこの歌だと思いました。五首目から相聞歌が続きます。その中でいいと思つた歌は、七首目〈白梅に潜るひとつのはなむぐり花が君なら虫がわれなら〉、下の句の畳みかけるような詠い方に気持ち溢れているんですが、抑えている感じがよくて、また「白梅に潜る」が、一首目の「白梅」と呼応していて構成もいいと思いました。十二首目の〈母親にならざるままに老いゆけるわが胸梨のごときわが胸〉は、思いを直接言わないけれど一抹の寂しさが伝わってくる歌です。この歌の前の八首目の〈女童の差し出すたんぼは女童の髪に飾りてほほゑむその母〉を受けて詠んでいます。この歌があることよって、十二首目がより生きています。いい歌はたくさんありますが、気になったところを言いますと、職場詠も相聞歌もちよつと淡い印象があつて、二十七、二十八、二十九首目あたりに、職場詠が相聞歌か、軸になる歌

がほしいと思いました。三十首目の〈人間はいづこより来ていつ去るやわが髪に吹く風に訊きたし〉という最後の歌はとてもいいと思います。

狩野 風間さんも三位に推しています。

風間 とても難しい病を持った方ですね。前回もチャレンジなさつていて、気持ちの強さが伝わってきて感動しました。相聞歌が心に響きました。二首目の〈二十人の図書館職員おほかたは未婚者であり吾もその一人〉、そうなんです。九首目〈図書館の事務職なれば予算書を見詰め図書費を捻出したる〉、重要な仕事をされていることがわかります。気になるところは、前回の作品との比較になるのですが、十二首目の〈母親に…〉の歌と、四首目の〈一歩づつ足曳き歩むはもどかしく青ぞらに杖放り投げたし〉、これだけ読むといいなあと思いますが、似たような歌が去年の作品にもあつたような気がします。あつてもいいのかなと思いますけどささやかな疑問です。それから、五首目〈世界の総人口七十五億人ただ一人きりの君と出会ひぬ〉、すごい出会いですね。そして二十一首目〈起きてまづ齒磨きをせむ七十五億分の一の君が消えても〉の歌、単独で出てくればいいですけど、五首目の「七十五億分の一」と同じ発想でちよつと残念です。二十八首目の〈粗相して濡れし裳裾を取り替へぬ足と脊椎いたはりなが



狩野一男氏

ら」という歌ですが、よく詠んだなど感じしました。「裳裾」は、スカートの裾が濡れたということかな。とにかく「粗相」という言葉だけで眼がうるうるしちゃうんですけどね。二十九首目〈製造は中止と聞きたる木製の松葉杖さん、われの両脚〉、「われの両脚」だから両方に松葉杖をつけているんですね。木製の松葉杖への思いや、感謝の気持ちが出ています。今は軽い金属製かな、木製のほうが温かいですね。自分の体の負を、客観的に捉えているいい作品だと思いました。

狩野 木畑さんが四位です。

木畑 水上さんがおっしゃったように、私も相聞歌がとても素晴らしいと思いました。仕事の歌もありますが中心は相聞歌だと思います。結果どうなったのか、詠んでほしかったです。彼とは別れたのか、二十首目〈空つぱ

のグラスのごときわれならむ君がゐないと割れてしまふよ〉と言っているんですよ。二十首目〈慕ひたるつもりが想ひの重すぎて飽和となりて今宵は驟雨〉、相手は去っていったのかしら。相聞歌が中心なのに寂しい終わり方なので、ちよつともつたないなと思いましたが。二十三首目に〈五年まへ共に撮りたる一枚の写真の君の下がりし眉毛〉という歌があります。片思いでも何でも、その眉毛が恋しい恋しいという思いの丈のまま終わってほしかったです。今は本当に相聞歌が少なくなっています。表現は淡いけど裡に熱い思いが漲っていますね。こんなに人を思うことができるなんて素晴らしい。彼が消えても思っている、そういうあつたかいいものを残してほしかったと思います。そして詠草の文字が美しいですよ。

狩野 前回は前々回も応募して長くがんばっている人です。こういう人の場合には鮮度から言って、読み手の側も読み方を少し革めなければいけないと思います。

木畑 私はとても新鮮でした。

狩野 では、四位の斎藤美衣さんの「夏の扉を押す」です。木畑さんが二位に推しています。

木畑 息子さんの大学退学がテーマです。それに悩みながら母親として成長してゆく過程がよく詠まれています。八首目〈母さんと呼

ばれてはい、と返事して。返事して、返事して、もう夕映え、ひしひしと身に迫るくらいよくわかります。十二首目〈天ぶらを揚げるじゃんじゃん揚げながらおふくろつぼさが可笑しくなりぬ〉、この方、四十二歳なんです。おふくろつぼさが自分に出てきたと、上手く自画像が書けてると思います。

もともと詩情豊かな作品を作る方ですが、今回は生活のリアリティーが加わって重みが出ています。二十九首目〈前髪を分厚く下ろさなくなつた二十歳の息子と作る牛丼〉なんて、いいじゃないですか。リズムがとても工夫されていて、鍵カッコがあつたり句割れがあつたり、句跨りがあつたり、リフレイン、表現の多様性があつて、読者を楽しませることが十分できています。構成も夏から始まって最後に秋になっていくのが内容と呼応しています。欠点は誤字があることです。十七首目の〈朝開く受診トレイに「給料が入りました」とあかき字灯る〉の歌の「受診」は「受信」ですね。あと、主語のない歌があります。連作なのでなんとわかりませんが、一首独立していると主語のない歌はわかりにくい。たとえば、九首目〈夕方のテレビに向かひ笑ふときおとがひの線ふるふるとする〉は作者でしょうか。三首目〈休学より退学が得なんだって〉スマホをベッドに放りつづ言ふの歌は、テレビド

ラマの一シーンを見てみたいですね。でも肝腎の主語がありません。それから、これは小島ゆかりさんのフリーズだと思ふところがあります。十首目の「真面目とは言はれたことがあつたけど真人間とは言はれたことなし」の「真人間」と、十四首目「さうぢやない言ひかけやめる中指の爪の縦線くるぐろと見ゆ」の「さうぢやない」から、どうしても小島さんの歌を連想してしまいます。自分の言葉で詠つてほしいです。小さいミスが気になつて一位には推せませんでした。

狩野 ほかも、昨年も注目して読んだ作者です。今回は息子さんが退学して、アルバイトをして、給料をもらったという決して悲しい歌ではないけれど、息子さんの退学というテーマは重苦しくて躊躇つたところがあります。歌の作り方、構成は評価すべき点があります。小島さんの影響を受けていますが、これはよくなるための過程だと思つてね、そういうところから自分らしい表現とか言葉を磨いていってほしいですね。では、五位の有川知津子さんの「ポトルシップ」です。水上さんが一位に推しています。

水上 歌のレベルの高さがダントツで、一位にしました。お盆に帰省した一連です。お祖父さんが捕鯨をされていて、ご両親も鯨の商いをなさっているご一家で、祖父、祖母、両親を詠っています。テーマと構成がしっかり

していると思ひました。一首目「長崎へ向かふ列車の窓のそと麦はむかしをいつも流れて、冒頭の歌として「長崎」が出てきて、長崎は作者にとつて縁のある土地、故郷かなと思わせます。二首目「誰が足の甲でありしかわれをのせ海のろんどのステップ踏みき」、足の甲に幼い自分を乗せて遊んでくれたという懐かしい思い出の歌です。足に乗つて揺れる感覚を「海のろんど」と比喩しています。四首目「ほほづきがしたから順にいろづいてゆくこと海の底のしづけさ」の歌は、「海の底のしづけさ」で、音のない静かな詩的世界を表しています。比喩で「海」を詠つて、十首目「大いなる伊勢海老さげてわだつみの海からまつすぐおちいさんくる」の歌に実在の海が出てくる上手い構成です。十一首目「かたちあるものはたしかな影をもつ祖父手作りの（ところん突き）」、お祖父さんは亡くなつても、お祖父さんの作つたところん突きが残っています。それを「影」で表現しているところが上手いと思います。十四首目「大正五年、埃及煙草の札を書く漱石もたり書簡がのこる」という歌は、「漱石」が唐突な感じがしますが、十一首目と同じ感覚で残っているものに注目して、情報としても楽しい歌です。「埃及」は「エジプト」と読みます。

十五首目「昭和四十二年一月、いさなとり海に逝きたる祖父三十九」、お祖父さんが三十

九歳のとき海で亡くなったということがわかります。「いさなとり」は「海」にかかる枕詞ですが、「鯨魚取」という漢字を書きますので、捕鯨に従事なさつていたお祖父さんをおもひ返して上手な使い方だと思ひました。十七首目「令和初年、商業捕鯨再開す三十一年の交渉の果て」、この作品は今年だからこそ作者にとつて詠む意味が大きかったのだと思ひます。二十四首目「航海図すこしゆがみて広げらるポトルシップの船長室に」、タイトルになつた歌です。ポトルシップは、船の模型を瓶の中で作り上げた工芸品です。この歌の「すこしゆがみて」が上手です。ポトルシップには希望や夢やロマンが凝縮されていて、お祖父さんの人生の象徴のように思ひました、それは有川家の夢や希望のようにも思ひました。二十七首目「祖父のある南氷洋につながつてゐたのであらう祖母の朝焼け」、お祖父さんは南氷洋で事故に遭い、水葬にされました。お祖母さんとの絆を強く感じさせて、景が広々としている、いい歌です。三十首目「ここからはしばらく波のいろばかり鳥のはしつこまなじりに消ゆ」、船で島を出て離れていくことを詠っています。少しの寂しさや余韻を残して最後の歌として抒情があります。この一連は全体的に表現の工夫のある良い作品でした。

狩野 読ませるといふことに関して、鍛えら

れています。訴える力と表現力を持っている人です。十三首目の〈楽しからんクリネックスをひゆひゆひゆつと空になるまで飛ばす子猫よ〉、子猫への視線もいいですね。この人にとって捕鯨のことは切り離せないテーマなんでしょうね。鯨漁の歴史や、またそれへの思い入れがびんびん伝わってきます。では、同じく五位の白川ユウコさんの「こんちゅう姉さん」、風間さんが四位に推しています。

風間 三十首に、三十種近くの昆虫が出てきておもしろい一連です。カマキリとか、コオロギとか親しみのある昆虫も出てきます。白川さんは昆虫に興味がある方なんだと思います。一首目〈冬山のエノキの落葉さらう父オオムラサキをさがしつづける〉、お父さんも昆虫マニアなんですね。四首目〈カブトムシよりクワガタが好きなのかこいつはきつと話がわかる〉、ユウコさんはクワガタの方が好きなんですね。八首目〈お風呂場がすべてタイドでありしころカマドウマよくあそびに來てた〉、なんでタイドだとカマドウマが来るのかな。十三首目〈南山溪でカバシタアゲハ捕りたればわたし一生姉には強気〉、十四首目〈台北の飯屋みたことないやつだー姉が両手で蜚蠊つかむ〉の二首から、作者は姉と張り合っていて、姉もたいしたものだと思っていることがわかります。二十三首目〈アキアカネしずかに朱き尾をつけるブルーおさめ

の後の水面に〉の歌は、観察の歌でこの一首だけでも生きているいい歌です。二十八首目〈ユウコだけに見せる秘密のヨナグニサン姉にも見せたでしょお父さん〉、父と姉と作者の関係がわかります。三十首目〈博物館のカワバツタの採集者わたし昔の名で出ています〉、作者が採集した昆虫が博物館に展示されているということでしょうか。一連を見る

と専門的なということがわかります。**木畑** 昆虫愛とほのかな家族愛がテーマです。個性的な一連だと思いました。昆虫の名前や比喩が効果的に詠われています。三首目〈小学生男子はみんなカナブンだ黒ランドセル背に飛んでゆく〉、比喩がおもしろいです。四首目〈点しか入れなかつたのは、助詞のない歌がいくつあったからです。十四首目〈台北の…〉の歌は、「台北の飯屋」で切れているでしょう? こういうのは荒っぽくて歌として未

七位から十一位まで

狩野 七位の高橋梨穂子さんの「森ではなくて」、風間さんが二位に推しています。念入りな批評をどうぞ。

風間 若い人で結婚している人です。一連に時の流れがあります。一首一首が独立しててしっかり詠われているんですが、三十首の繋がりがありません。でも読んでいくとなん

完成な感じがしました。三十首目〈博物館の…〉の歌ですが、「わたし昔の名で出ています」という歌謡曲のような結末は俗で、せっかく独自の見方をしているのにもつたいないです。それから、小学生のときの思い出とか、場面があっちこちに飛んでいます。たとえば「台北」があつて、十七首目〈ひなひなとヒメシロチョウが舞っていた富士山麓の磐石の上〉、とてもいい歌なんだけど、「富士山麓」です。今のことが昔のことか読者が翻弄されてしまいます。昆虫を並べただけという感じがして、もつと構成を考えられたいと思います。昆虫愛の上に、もうちょっと家族愛の歌が、テーマとして浮き上がってくる

といいと思いました。**狩野** ぼくは五位。おもしろい歌です。お父さんが在野の昆虫研究者で、ユウコさんもお姉さんも強い影響を受けているようです。

となくまとまりがあるという認識を受け、二位にしました。日常生活の中の心の揺らぎのような、短歌にするべきちょっとした気付き、それをうまく掬い上げています。一位に推した寺田さんの一連はテーマがしっかり立っていて、そこから枝のように歌がどんどん伸びている感じ。こちらの方はテーマが横に

寝ていて、歌の方からちょっと触っている感じです。二首目〈効果には個人差があると書いてあるその個人差を考えている〉、下の句が散文的ですがそこに批判精神があると思いました。「個人差」は製薬会社の逃げ道ですね。戻りますけど一首目〈スフィンクスのような姿勢で腹痛に耐える月のみ明るい夜半〉、その後、薬を処方されたのでしよう。三首目〈友人が次々佐藤になっていく夫婦同姓婚のさみしさ〉の歌と、二十九首目〈友人の旧姓胸に閉じ込めて宅配便の送り状書く〉の歌が対応しています。この友人も「佐藤」になったんでしょうね。おもしろいと思いました。二十七首目の〈首つかむやさしいちから 日焼け止めクリーム塗りあうときの手のひら〉はちよつと甘い相聞歌と受け取りました。水上 私は六位です。新婚の日常と女性としての自分を詠んでいます。具体的な言葉の出し方が上手いなと思いました。一首目の〈スフィンクスの：〉の歌の初句「スフィンクス」から詠つているところも上手いですし、六首目〈図書館の本にいつかの人のメモ挟まつていて「めんつゆ」とある〉、「めんつゆ」とあるだけでおもしろい歌ができるとわかっている作者だと思いました。十九首目もそうですね、〈へその穴しつかり洗う丁寧な暮らしのひとつとして課したこと〉の歌の「へその穴」もそうだと思います。女性としての自

分という歌は、風間さんがおっしゃった三首目の〈友人が：〉の歌、結婚したら通常女性が男性の姓に変えるという疑問が詠われています。堅苦しくなく日常の歌として詠まれているところが上手いです。九首目〈綿帽子かぶる瞬間津田梅子、ココ・シヤネルらの空を想った〉の歌は、活躍した二人の女性を挙げて、綿帽子をかぶったときに自分も女性であることを強く意識して、結句にちらりと野望や希望が見えます。それからいいと思つた歌は、七首目〈沈む前もとも強く照りつけて別の国へと向かう太陽〉の「別の国へと向かう太陽」という把握の仕方に独自性があります。三十首目の〈いい夏になりそうだなあいい茄子の見分け方など教わりながら〉という歌がいいと思いました。中ほどに、十六首目〈ベランダの窓に額を押しあてて用もないのを見る茄子の花〉、十七首目〈誰からの手紙も届かない日々指輪をはずしてこねる挽肉〉のような寂しい歌もあるんですが、最後の歌は人とコミュニケーションをとつていて、素直で明るくていいと思います。気になるところをあえて言いますと、言葉の出し方が上手いと言いましたが、逆に六首目の歌の「めんつゆ」、十九首目の「へその穴」など、おもしろい言葉を出せばいいというところに落ちたらやだなあと思って、今後は言葉に頼らないで深みのある歌ができたらいいなと思

います。狩野 雑詠のおもしろさがありますね。将来が楽しみです。では、八位の三沢左右さんの「二水」。水上さんが四位に推しています。水上 感覚が独特です。物の見方や距離感を常に掴もうとしているという印象があります。これを読んでいる読者もいっしょに確かめる感じがしておもしろい一連だと思いました。一首目〈どれほどの速度に森は流るるか風分けてゆく蛇の両眼に〉、視覚を蛇の視点で捉えているところが珍しくて愉快です。五首目〈錠剤の抜け殻凹みあはれ蟬なんと巧みに脱皮するもの〉、「錠剤」から「蟬の抜け殻」にスライドしているところが不思議な感覚でいいと思いました。六首目〈わが部屋のもつとも立方体的な立体として食パン立てり〉、部屋には立方体的なものが他にもいっぱいあるのに柔らかな「食パン」を詠つています。三首目の〈硝子戸を震はすほどの風もなし今朝は絵を描くために起きたり〉という歌から、作者が絵を描く人だとわかります。遠近法を詠んだ歌、例えば十首目〈東山とほく寝そべり山までの京都の家はつぶつと建つ〉と、二十二首目〈チェック模様目近に見ればはるかなるビルの窓らと同じきサイズ〉という視覚の歌がおもしろいと思いました。歌はうまいのですが、一首一首がばらばらで三十首まとめるとい意味が薄く感じられた

ところが残念でした。

木畑 私も水上さんがおっしゃったのと同じでね、絵を描く作者らしく、物の見方、描写がうまいと思いましたが、このタイトルの「二水」はなぜ付けたのでしょうか。二十一首目へまひるまを二水の漢字思ひつゝ^{二水} 匠^匠とふ熟語夏は触れたし^{二水}の歌から付けられたのですが、「熟語に触れたい」というのがわかりませんでした。他にもわからない歌があつて、五首目の（錠剤の…）の歌が錠剤の歌なのか、蟬の歌なのかわかりませんでした。「あはれ」はいらぬから、わかるように詠つたほうがいいと思います。それからテーマがわからないですね。十七首目へ八月をたつぷり描く映画観ていくつもの八月胸にほめく、とつてもいいものを詠んでいるのにここからの発展がないように思います。十九首目へ（こころみにいつぼん道を目つむりて歩めり怖くなりて目ひらく、視覚障害者の身になつてやつてみようと思われたのかもしれない）せんが、この歌も発展がなくてもつたいないです。最初、水上さんがおっしゃった一首目、すごくいいですよ。三十首作るといふ意味をもう一回考えて詠んでみてほしいです。私は「絵」に統一するとかして何か伝わってくるものがあればいいと思いました。

狩野 ばらばらですが、読ませるものはありますね。国語学に詳しい作者です。では、九

位から十一位は一言ずつお願いします。藤井徳子さんの「済洲島の灯」、木畑さんが五位に推しています。

木畑 今、境涯詠というのがすごく少なくなっていますね。久々に境涯詠というのを読んで感動いたしました。この三十首を作るのに、長い歳月が入っているし、夫への思いが入っているし、そういう意味で私は高い点を入れました。

狩野 では十位。八十四歳の江頭洋子さんの「口角上げて」です。九州人の活きのいい女性です。水上さんが五位に推しています。

総評と受賞作決定

狩野 長時間にわたる座談会、お疲れさまでした。以上、上位十一名の作品を見てきました。合計三十九点の寺田静さんの「零と壱の森から」を第六十六回O先生賞の受賞作に推薦したいと思います。みなさん、いかがでしょうか。

木畑、風間、水上 賛成です。（拍手）

狩野 最後に一言ずつお願いします。

風間 私は作品に一本の串が通っていることを大事にしました。こういう賞に応募するとき、明確なテーマがあつたほうがいいと思います。

水上 歌の上手さはもちろんですが、作者の

水上 タイトル通り、前向きで楽しい一連です。ユーモアのある歌と、戦争のことや戦後の長崎を詠んだ歌群がいいなあと思いました。

狩野 次は、十一位、八十七歳の北条さんの「令和」離陸です。風間さんと水上さんが七位に推しています。

風間 眼が世の中に向いていて批判的に見ているおもしろい一連でした。逆にそれがマイナスかもしれないけれど、批判をまとめた意欲を評価しました。

水上 私も時事詠と、自分の年齢を客観的に詠んでいる歌がいいなと思いました。

思いが伝わって、心が揺さぶられるような作品を期待して読みました。

木畑 五十代の活躍がすごいと思いました。

コスモスで新しい人が育っていることが直に感じられて心強く思いました。テーマがあることは大前提で、作品のメッセージを読者にどう伝えるかが大切です。

狩野 ありがとうございます。

木畑、風間、水上 ありがとうございます。

令和元年10月14日（記録 水上比呂美）

第六十六回

〇先生賞候補作品

本年度の〇先生賞選考では、受賞作品のほかに候補作品二十篇が決まった。このうち優秀作品三篇、佳作として九篇をそれぞれ抄出し掲載する。

優秀作品 雑草図鑑

稲垣 草 歩*

「雑草という植物はありません」雑草図鑑はきつぱりと書く
見て見てとう子の声聞こゆ、たんぽぽのぽぽの字ほどの暖かき午後
沈みゆく憂いのごとく散らばりていぬふぐり咲く春の深みに
動けないタンポポたちが動かずに空を見ている月曜の朝
いたどりの芽生えの燃えるごとき赤、だんだん失せて大人になりぬ
ステラリアが疲れて深く眠る夜、アークトゥルスはそつと輝く
父の背という虚ろなる存在よ父子草ひとつ物言わず咲く
空の青、木々の緑を疑わず白花蒲公英の白の悲しき
おひさまのあたるところに我がいてあたらぬ道に薺花咲く^{等々}
世の中のつらさ悲しさ儂さをこぼした宙に咲く犬ふぐり
道端の排水口の光射す奈落の底で草は伸びゆく
うつすらと紅蓼の咲く音がする、世界が始まる午前二時半
植物の名はカタカナで書きなさい、シロバナヨウシュチョウセンアサガオ
UFOはヘラオオバコの形して夕闇を待つ草むらの中
火星よりたどりつきたる種ならんピロードモウズイカの花光る
ざわざわと騒ぐ声あり草はらに台風十号迫り来る夜

ほろ菊は悲しき紅の色をもち角の空き地にうつむきて立つ
待つという動詞の黒き輝きを密かに抱いて待宵草咲く
うなだれたまままつよい草萎みけり八月六日八時十五分
それなりにいろいろあります。曲がつたり傾いたりして泡立草立つ
くつついてまとわりついて知らぬ間に離れゆくものかおなもみの子は
初恋の人母となり祖母となりいつもの道に春紫苑咲く
いつかとう淡き約束漂いて待宵草が咲く夕まぐれ
生きる葉と枯れる葉を持ちて草は立つ赤紫の西の日の中
瀬戸内の小島が見えるタンポポの綿毛が超えゆく塀の向こうに
「雑草という植物はありません」その雑草の雑を愛せり

優秀作品 わが髪に吹く風 山口 照子

ふくふくとふふめるままの白梅がけふのあかときはつかにひらく
二十人の図書館職員おほかたは未婚者であり吾もその一人
幾万の著者の思ひの熱量に圧されて書架の間に立ちをり
世界の総人口七十五億人ただ一人きりの君と出会ひぬ
君からのメール待ちをり君用の着信ランプは蒼天の青
白梅に潜るひとつのはなむぐり花が君なら虫がわれなら

女童の差し出すたんぽぽ女童の髪に飾りてほゑむその母

図書館の事務職なれば予算書を見詰め図書費を捻出したる

NO MORE WARの思ひを語り継ぐための朗読会の「原爆詩集」

母親にならざるままに老いゆけるわが胸梨のごときわが胸

一步づつ足曳き歩むはもどかしく青ぞらに杖放り投げたし

ひとたびでいいからわれを素手抱きて歩いて欲しも誰もぬない浜

「髪の毛がいささか寂しくなつたぶん身軽なものさ」と君はへうげる

君のあと追ひたしと逸るわが脚は押し戻されつ向かひ風きて

ひさびさに聴く君のこゑ「やあ」の声ぶつきらぼうにはにかむやうに

心とはうつろひやすくをりふしは丸から四角、三角、いびつ

空つぽのグラスのごときわれならむ君があぬいと割れてしまふよ

起きてまづ歯磨きをせむ七十五億分の一の君が消えても

慕ひたるつもりが想ひの重すぎて飽和となりて今宵は驟雨

五年まへ共に撮りたる一枚の写真の君の下がりし眉毛

わが髪伸びる分だけ刻々とちぢむ命よ生きるといふこと

一步一步杖つきあゆむ草の道みづの香のする風が来る道

曾祖母が嫁ぎし折りに植ゑしといふ鹿の子百合咲く百年の花

粗相して濡れし裳裾を取り替へぬ足と脊椎いたはりながら

製造は中止と聞きたる木製の松葉杖さん、われの両脚

人間はいづこより来ていつ去るやわが髪に吹く風に訊きたし

優秀作品 夏の扉を押す 斎藤美衣

片耳に仕舞つたままの子のこゑが時折聞こゆ雨の晩など

あれは夢だつたのだらうか「春の空と同じくらいに母さんが好き」

大学事務室からの電話

「休学より退学が得なんだって」スマホをベッドに放りつつ言ふ

おもむろにジャージの裾をまくり子は風呂のタイルをこすり始めぬ

ジャージからスリムパンツに履き替へて外に向かつて夏の扉を押す

シヤケ多目と言はれて握つたおにぎりがほのあたたかく忘れられてあり

二回目の面談終へてA4の紙一枚で退学をする

母さんと呼ばれてはい、と返事して。返事して、返事して、もう夕映え

夕方のテレビに向かひ笑ふときおとがひの線ふるふるとする

真面目とは言はれたことがあつたけど真人間とは言はれたことなし

ありふれたことではあるが母といふ象徴であるはまことむづかし

天ぶらを揚げるじやんじやん揚げながらおふくろつぽさが可笑しくなりぬ

さうぢやない言ひかけやめる中指の爪の縦線くるぐろと見ゆ

皇學はセブンイレブンをバイトを始めたワシ

コンビニのバイト仲間の王さんの話をきのふも今日も聞きをり

冷やうどん汁を飛ばして食べながら今日廃棄した弁当数ふ

滞納の国民年金二月分初給料日に子は納付する

肉薄き体についてばん力込め急勾配を子は駆け下りぬ

食べていくとは給料をもらふことなのか 朴の葉ひるがへり落つ

流水に右手をかざしこの二秒すこしほんやりしてゐてよいか

糞虫のひとつ付きたる自転車のカバー外さずこの夏が過ぐ

「母さんは勝手なんだよ」ああ、いつかわたしも母に言つた 夕焼け

ポーと鳴くきじばと一羽ブラウスの胸の合はせの奥に鯛ひをり

膝つきて床を拭くとき内臓の位置関係を考へてみる

川べりのアキノノゲシが順番に立ちて遠くのわが子を採す

前髪を分厚く下ろさなくなつた二十歳の息子と作る牛丼

秋の靴、さう言ひたくて買ったんだ九月の土をあたらしく踏め

佳作 ボトルシップ

有川 知津子

長崎へ向かふ列車の窓のそと麦はむかしをいつも流れて

誰が足の甲でありしかわれをのせ海のろんどのステツ踏みき
人類がはじめて月に降りたときわれは五か月まだ一人つ子

ほほづきがしたから順にいろづいてゆくこと海の底のしづけさ
緑、黄、赤、白そして紫の五色の幡が仏間にさがる

母のため植ゑられたりし桐の木、離怖畏如来のむらさきの花
竹の根に鼻を寄せればだんご虫みづからの皮を食みゐるところ
大いなる伊勢海老さげてわだつみの海からまつすくおぢいさんくる
かたちあるものはたしかな影をもつ祖父手作りのへところてん突き

楽しからんクリネックスをひゆひゆひゆつと空になるまで飛ばす子猫よ

大正五年、埃及煙草の札を書く漱石あたり書簡がのこる

昭和四十二年一月、いさなとり海に逝きたる祖父三十九

いつまでも柩は見えてゐたといふ南氷洋のあをき浮力に

令和初年、商業捕鯨再開す三十一年の交渉の果て

父母はくちらを商ひつづけたり下のおとうと小6だつた

昭和六十一年、南氷洋での商業捕鯨完全停止
鯨肉を食べぬ人増ゆ〈鯨組〉かつてありにしここ五島でも

いのちからのちいただくのちです鯨供養を今年も終へる

三月に高速艇とぶつかつたくぢらよこよひ歌つてゐるか

小数点以下の気持ちをひきつれて星の林をゆくははきはし

航海図すこしゆがみて広げらるボトルシップの船長室に

ランドセルは船の運びしオランダ語小さな辞書にもきちんと出て

奥津城へつづくあしたの草のみち三つ四つの飛蝗と行きけり

祖父のゐる南氷洋につながつてゐたのであらう祖母の朝焼け
耳の奥のかすかななるみづ冷えてゆき麝香揚羽は秋のはばたき
ここからはしばらく波のいろばかり鳥のはしつこまなじりに消ゆ

佳作 こんちゆう姉さん 白川 ユウコ*

冬山のエノキの落葉さらう父オオムラサキをさがしつづける

啓蟄の宵に始まる響きありクビキリギスの声ひとすじに

小学生男子はみんなカナブンだ黒ランドセル背に飛んでゆく

カブトムシよりクワガタが好きなのかこいつはきつと話がわかる

ヒロくんはモンシロチョウに食べさせるキャベツとレタス区別がつかぬ

お風呂場がすべてタイルでありしころカマドウマよくあそびに来てた

氣象庁よりは正しく梅雨明けを知りておるらしニイニイゼミは

姉の捕りし奇妙な貌のクマゼミは新種か異常型かは知らず

南からあきつしまねをのほりゆくナガサキアゲハごらんさいな

お母さん西表島の船着場でツマベニチョウをなぜ逃がしたの

南山溪でカバシタアゲハ捕りたればわたし一生姉には強気

富士山をおおきくのぞむゆうすげの野原をよぎるミドリヒヨウモン

ひなひなとヒメシロチョウが舞っていた富士山麓の軽石の上

こんなのを捕りにきたんじやないのになカシワマイマイばかり元氣だ

なだらかな坂道のぼるハンミョウの香りのついた手を嗅ぎながら

井川線無人の駅にコクワガタ昼寝しながら夜を待ちおり

スミナガシ沢のむこうに去りにけり此岸の午の炎暑とともに

無花果の樹のカミキリをつかまえて無花果のおばさんがよるこぶ

無音なる異常事態あり石垣にトゲナナフシが数え切れない

コオロギを籠に集めて鳴かして翌朝見れば全滅しおり
アキアカネしずかに朱き尾をつけるブルおさめの後の水面に
カルメ焼きみたいなたまご野にのこしかマキリたちは何処へ去りしか
ユウコだけに見せる秘密のヨナグニサン姉にも見せたでしょお父さん
世界とはおおきくうつくしきものと教えてくれシタイヨウモルフォ
博物館のカワラバツタの採集者わたし昔の名で出ています

佳作 森ではなくて

高橋 梨穂子*

佳作 二水

三沢 左右

紋黄蝶そこはトマトがおいしげるベランダなのよ森ではなくて
何日も悩んで買ったサンダルをタゲも切らずにリビングで履く
新品のサンダルだから室内で履いても平気 ステップを踏む
首つかむやさしいちから 日焼け止めクリーム塗りあうときの手のひら
友人の旧姓胸に閉じ込めて宅配便の送り状書く
いい夏になりそうだなあ いい茄子の見分け方など教わりながら

スフィックスのような姿勢で腹痛に耐える月のみ明るい夜半
効果には個人差があると書いてあるその個人差を考えている
友人が次々佐藤になっていく夫婦同姓婚のさみしさ
きみと選ぶプラチナリングに風を切るスポーツカーのような曲線
図書館の本にいつかの人のメモ挟まっついて「めんつゆ」とある
沈む前もつとも強く照りつけて別の国へと向かう太陽
あれこれと纏い巻かれて弾丸も弾いてしまいうるな白無垢
綿帽子かぶる瞬間津田梅子、ココ・シヤネルらの空を想った
寝転ぶとフローリングが骨盤のありかをしかと教えてくれる
カーテンに消臭スプレー吹きかけて無臭の匂いになる雨の朝
ベランダの窓に額を押しあてて用もないのに見る茄子の花
誰からの手紙も届かない日々に指輪をはずしてこねる挽肉
午後五時半ひとつふたつと呼吸して義母の電話に下の名で出る
へその穴しつかり洗う丁寧な暮らしのひとつとして課したこと
狼のように気高い遠吠えを試みてたくなるごみ捨ての夜
誰からの許可もとらずにカーテンの隙間がそっと受け入れる朝

どれほどの速度に森は流るるか風分けてゆく蛇の両眼に
硝子戸を震はすほどの風もなし今朝は絵を描くために起きたり
透明のクリップかるくおさへつつ真夏の部屋の壁に絵を吊る
錠剤の抜け殻凹みあはれ蟬なんと巧みに脱皮するもの
わが部屋のもつとも立方体的な立体として食パン立てり
取手には冷めやらぬ熱 立秋の葉缶の肩はみなぎつてゐる
太陽は天の最中なかに吊るされて家蔭かげのかたちじんみり変へつ
二人ゐて一人は友達の間合一人は部下的間合に会話す
東山とほく寝そべり山までの京都の家はつぶつぶと建つ
どの道も足が憶えて かつて行きし西友にもう「無印」はなし
胸にあるアンブに夏を呼吸して「リンドリンドリンド」と蟬鳴く
へりは飛ぶ藍色深き風のなか空より低く雲より遅く
肌の色黒き青年のすこやかさもつとうるさくドア閉めてよし
映画館はみなそこに似て息淡しくらげの腹に背をあづけつつ
八月をたつぷり描く映画観ていくつもの八月胸にほのめく
横雲といふは夏にはないのだなもつこもつこと雲沸き上がる

こころみにいつぽん道を目つむりて歩めり怖くなりて目ひらく
まひるまをニ水の漢字思ひつつ「コト互酒」とふ熟語夏は触れたし
チエツク模様目近に見ればはるかなるピルの窓らと同じきサイズ
梅田上空100mに巨大なる水風船の割れて 雨ふる
にはたづみあ、といふ間に乾き去り残れるはただ風なき葉月
真夜中の線路沿ひの道蹴つてゆく空色ふかきシャツのランナー

佳作 濟州島の灯

藤井徳子

濟州島チエジュドの茅葺屋根とランプの灯ほわーんと思ゆる夫の生家
児らを連れはじめて夫の産土に立てば無量の星のふる村
日本の嫁メノリと義母オモヒが喜びて庭に踊れりひびくよ長鼓チヤンゴ
片言の日本語話すミヨちゃんは吾より十五歳上の義妹シトセシ
ふたり児がかはるがはるに抱かれて高いたかいと星に届くまで
日本に職業変へ来し夫の名創氏改名「山内豊重」
本名の趙容厦チヨウヨシハの名を匿しきて日本に生き来し六十余年
行く先ははや黄泉路への刻限か「いま何時か」と言ひてそれきり
日本を愛しわたしの手の許に趙容厦逝く 無窮花ムゲンフワの散る
悪筆と夫認めをり 恋文をもらはぬままに永訣をしぬ
夫好みの赤を幸福の色となしはづすことなきルビーの指輪
うぶすなの造水里チヨウスイリに電灯引きやれる夫の記念碑に子らと立ちたり
海鮮の店に趙家の十人の日本と韓国のことば飛び交ふ
濟州島の趙家の墓に趙容厦の魂入れてお骨カウツは入れず
空港に互みに抱き合ひありがたう永遠カムサハムニダに忘れぬカムサハムニダ
義妹のミヨちゃん死すと言ふ知らせ哀号アイゴウ哀号スマホを握る

佳作 口角上げて

江頭洋子

分骨をすると言ひしを守り来て山内豊重の墓に傘差す
夫の墓に触れるに何とあたたく抱かれし記憶娘に言はず
死ぬほどの恋なしとげし昭和あり平成末年ひとりの生活タツキ
夫の亡き家は寂しきものなりと思ひたくなし さくら草増やす
アングアンテ・カンタービレの目覚めなり令和初日をうぐひすの鳴く
六時半いつものラジオ体操で老体もほらほぐれてきます
しろたへの碗で新茶をすすりたり色とかをりと令和の淑気
花盗人して挿し木せしあぢさるがにんまり咲けりもも色ふたつ
桜桃忌、祖父の命日、わが婚を決めた雨の日はなあふち咲く
飛んでゐる蚊を素手でエイッ！ホーマー一発かつ飛ばした感
園よりもすこし気取つた苑である新宿御苑また広辞苑
あつたよねサツカリンまたズルチンといふ毒々しきあの甘味料
戦中のヘイタイさんのカーキいろ国防色は勝ちいろだつた
八月九日十一時二分サイレンに合はせ黙禱すせみ頻き鳴けり
原爆のはなと言はるる夾竹桃ことしも咲けり平和公園
被爆者が水をもとめて死にしとふ浦上川は静かに流る
どのやうに生きてもひと世口角を上げて歩かうかくかきくけこ
あさの潮ゆふべの汐のほひくる出島海岸外人おほし
すり鉢の形に山の家の灯が徐々に増えゆく長崎セレーナード
じやが芋の焼酎「じやがたらお春」酌むビンのお春さん御機嫌よろし
老いたれどをんなですもの汗はめる乳房抱きてうまき夢見ん
ひい孫が歩きはじめぬその足は二十二世紀を跨ぐ足なり

佳作 「令和」 離陸す 北条 忠 政*

十六回内閣替わりおびただしき災害受けて「平成」終わる

「平成史」八冊を買いルーベにて読みたり入梅まぢかな夜を

束の間の野党政権惜しみつつあみだにかぶるわが夏帽子

筆で書く最後にならむ「平成」を丁寧^{しのめ}に書きて写経を終える

東雲を淡く彩る初日の出「令和」は今し離陸遂げたり

「転職は慎重に」という見出しつけ転職誘う人材センター

丸木橋で角突き合わす山羊に似て共に落ちむか米中首脳

出雲大社の二札四拍響りあえり大注連縄を震わせながら

色弱のわれにも映えて遠景の大山麓^{だいでん}の青葉そよぎぬ

目の前の声も彼方の騒音も選別をせぬわが補聴器は

八人の声は同時に入りくる聖徳太子ならざるわれに

柿若葉さやけく揺れる季にして免許更新分岐点なり

一札し喪中はがきを読み返す「令和」待たずに十五人逝きて

何とまあ珍しからむ光景か優先席を老いが占めおり

百歳まで生きむとすれば二千万貯めねばならぬペシミストわれ

羽衣を脱ぎたる天女の群れ踊り浅草サンバの汗がかがやく

囲碁三敗口惜しけれども健診の概ねセーフを嘉して帰る

佳作 未来を回せ 高山 幸 子*

うぐいすと磯ひよどりの鳴き交わす山里の春は空より降り来

桃太郎わが家に三人育ちいる蝌蚪^{みたり}とる声の朝からひびく

「どうやって脱走したん？」四歳の不思議をさそう蟬の脱け殻
おさな鬼をバギーに乗せて歩む里玉葱ふとり豌豆のびる

ままごとの相伴なればまんずますりユウノヒゲの実柿の葉に盛る

虎杖を折れば野の音とびだせりばむぼむぼ憂さもとばせり

朝な夕な戸袋のぞくが日課なりセグロセキレイ巢籠りはじめ

えさねだりいっせいに開く朱色^{あけいろ}の口を数えるひなは五羽なり

霧深く里も田圃も吞まれゆく憲法九条くきやかに頭て

わが町のパイオマス発電を見学す杉のチップの香り立ちくる

ドッジボール「おりゃあ」と男児の投げる球「おうっ」と女児が受ける圍庭

山茶花の蕾も独楽とする児らよ未来を回せ臆せず回せ

佳作 風はきまぐれ 大平 勇 次*

言い訳を言うことできぬねじ花はねじれたままで風にふかれる

「健康にただちに害はありません」忘れられない言葉となりし

フクシマは世界史に残り風評が風化するなど考えられぬ

膨大な核のごみには口閉ざす関係者には妻も子もいる

水蒸気爆発などと巧みなる言葉遣いで被曝させらるる

マスコミが追及しても口閉ざす炉心溶融認めがたとしと

亡くなりし吉田所長の声消えず東電本社に助け呼ぶ声

風評と言えば風評真実と言えば真実風は気まぐれ

避難することのできない浜菊が荒磯の崖に二本ゆれてる

世界一厳しい規制という神話ふたび作り恥じることなし

事故処理もままならぬまま世の中に再稼働する空気を作る

核のごみ大量生産したことを見ないふりして死んでは行けぬ